

氏名	乗越 皓司 のり こし こう し
学位の種類	理学博士
学位記番号	論理博第495号
学位授与の日付	昭和50年7月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	Changes in troop membership of the male Japanese monkeys at Arashiyama (嵐山におけるニホンザルオスの群れ間の転出入)

論文調査委員 (主査) 教授 河合雅雄 教授 川村俊蔵 教授 森下正明

論文内容の要旨

各個体の血縁関係や分裂等の社会関係が長年にわたって詳しく調べられているニホンザル自然群（嵐山 A, B 群）を対象にして、6 年間にわたる連続観察を行い、群れの社会構造およびオスについての社会関係の分析から、オスの社会的発達と群れ移出入の社会的要因の解明を試み、次の結果をえた。

1. 群れの中心部のオスは、年令が 8 歳以上で、長期間にわたって群れを構成維持するメンバーである。オスグループや周辺部のオスは、その集団に留る期間が短く、4 歳から 7 歳のワカオスによって構成されている。

2. 中心部のオスの間には、順位変動はほとんどないが、周辺部のオスやオスグループでは、順位変動ははげしい。

3. オスの社会的発達段階を空間的位置の変化で示すと次のようになる。①母親のいる中心部で生活しているアカンボウ期、子供期（0～2 歳）。②群れの周辺部に出ていく少年期（2, 3～4.5 歳）。③隣接群に加入するワカモノ期（4.5～7, 8 歳）。④他群の中心部に加入するオトナ期（7, 8 歳以上）。⑤隣接部に加入して 5, 6 年でその群れを離れ、メリタリになったりいくつかの群れを渡り歩いている時期。

4. オスの順位形成は、3 に示した社会的発達段階に対応した次の 3 つの段階がある。①生後まもなく、母親の順位と対応する順位が同年令の個体間に形成される（第一次順位形成）。②隣接群に加入する 4.5 歳において、仲間関係、グループに加入する時期や年令などによって、新しい順位が再編成される（第二次順位形成）。③オトナ期を迎えた 8 歳前後に中心部に加入して、中心部の個体との間に新しい順位を形成する（第三次順位形成）。

5. 群れ離脱は、成長にともなって新しい地位を獲得する過程において、つぎの成長段階における順位秩序の中うまく位置づけられないため、順位を追いぬかれることによって起こる。

論文審査の結果の要旨

申請論文は、ニホンザル社会にみられるオスの群れからの離脱という現象を、嵐山に生息するニホンザル個体群を対象に、6年間にわたって追跡し、その機構の一部を解明したものである。嵐山の群れは1966年にA、B 2群に分裂した。申請者が研究に着手した時は、すでに全個体の血縁関係が明らかにされていたが、全個体を識別し、それに基づいて詳細な分析を進めた。個体の成長の過程、社会的位置に従って順位の確認を繰り返し、従来推測による段階の域を出なかった離脱の機構を、順位の変動に基づいて解析した。申請者は、オスの社会的な発達段階を5段階に分け、発達に伴って推移する各段階の空間的な位置関係を示すと共に、オスは3つの異なった順位秩序に順次組みこまれながら成長を遂げることを明らかにした。

第一次順位形成は、生後間もなく母親の順位と平行して形成され、ついで4～5歳になると、群の周縁部に加わり、そこで再編された新しい第二次順位秩序の中に組みこまれる。さらに8歳前後に達したオスは、移籍した群れの中心部のメンバーとの間に第三次順位を形成する。以上の事実は、ニホンザルの社会構造、オスの社会的な発達といった側面からみても重要な知見である。さらに、オスは原則として出自群を離脱し、さらに、移籍先の群れをも5～6年で離れることを明確にしたこと、また、オスの発達段階の過程で順位秩序の中に順調に位置づけられない場合、下位のオスによる順位の追い抜きの起こることが離脱の契機になる、とする結論も独自のものである。以上の分析に基づいて、ニホンザルのオスの15歳位までの生活史の曲折と、ニホンザル社会におけるアウトブリーディングの機構を画きあげ、群れを越えたより上位の社会構造である“コミュニティ”の構造に迫ろうとした。この他、オスの移籍を誘導する血縁に基づく依存関係やオスグループの社会的機能についても詳細な分析がなされている。

副論文3編中、1は嵐山のニホンザルの個性性の把握を試みたものであり、2、3は、主論文の内容並びに嵐山のニホンザル個体群についての研究の全容を補うものである。

申請論文は、従来ニホンザルの社会構造論において重要な論点となっていたオスのライフサイクル、とりわけかれらが群れを離脱するという現象の解明を目的として、所期の成果を収めた精度の高い研究であって、経時的な分析によって霊長類社会学に新しい局面を開いたものとして高く評価できる。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。